
御祝儀 -闇レート麻雀の集い-

ラス目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御祝儀 - 闇レート麻雀の集い -

【Nコード】

N5340Y

【作者名】

ラス目

【あらすじ】

御祝儀とはボーナス。

麻雀にはつき物のこの祝儀麻雀。

レートを張り、人食いの亡者がいた。

その亡者は垢抜けた子供である。

幼稚（前書き）

序章なので超短いです。

幼稚

畜生…。一体どうしちまったんだよ俺！
結果はさんざんなものだ。

勉強やスポーツが出来ない、そしてモテない不細工な俺が唯一活躍
できて目立つことのできた麻雀…。
違うのはレート位だ。それだけだ。

オーラス南4局 親・配牌 持ち点900点

1258m3456p269s北白撥 ドラ西

1000点≡5000円のレートでウマ10・30、赤・一発・裏
ドラ1枚につき5万円の祝儀麻雀…。
ラス親でトップとは42400点差でこんな配牌か…。
何を打ち出す？どんな手になる？最終形は何だ？？
全く傍目からは酷い有様だろう…。

- 数日前 -

「ローン！大三元！！！」

俺は手牌を倒し祝儀を握り浮かれてた。
きつとこの時からなのだろう。

対面の男は自分の点棒を右手で掴み投げ捨てた。

「マナー悪いな。役満振り込んでムキになるなつつの。」

「振り込む？ははっ。差し込みの間違いだな。」

対面は鼻を膨らませ

「点5で役満振つても関係ないね。だってお前はこの程度のレートでしか勝てねえのよ。俺クラスになるとな、これの十倍くらいじゃないとマジにならねえのよ。」

と怒鳴り散らした。すでにこちらの卓に視線が集まっている。

「どうだ？後日、高レートに案内してやってもいいぜ？」

対面はガンをとばしてこちらを睨み付けている。

相変わらず大きい鼻の穴だ。

こちらとしてはおいしい話だ。断る理由などなかった。

軍資金を集めるのは簡単だった。

タンスの一番下の引き出しには貯金通帳と印鑑。

通帳には0が6個もあった。

200万。あの程度の面子だろう…。心配はない。

予想とは180度も違った。

下家の男、上家の男は明らか雀ゴロ。

あの鼻の穴が大きい男に至っては…。まるで別人。

点5の時と大違いだ。打ち筋も性格も。

静かな打牌、先ヅモもしない、そして笑顔。

これが本気なのか…。あの大きな穴からは空気など行き来していないような…。

まあ、だいたいの結果はこうだ。

ラス・ラス・ラスで更にラス。

何局打ったかも覚えてないし、どんだけ食われたのかも覚えてない。軍資金の入った袋を確認するのが怖かった。ここは高レートであることを実感した。もうこの局もラスだろう・・・。そろそろ軍資金もなくなるか？誰かたすけ・・・。

「じゃー・・・ローレートあるっ？」

幼稚な声が高らかに聞こえた。

罰符

その幼稚な声に視線がいく。

そこには幼い男の子がいた。幼稚園児か小学生低学年くらいの男の子。大きな紙袋を持ち部屋の隅々まで目をやっている。

「おい、こんな夜中に子供がうるつくなよ。さっさと家に帰るんだな。」

下家がそう言った。が、聞く耳を持ってない。完全に卓に入るつもりなのだ。

「麻雀したいの？」

ふくよかなオーナーが言った。

「うん！おかねあるよお？」

そう言っつて紙袋を開けた。

そこには札束が溢れかえっている。

頭のよろしい人の顔がつまっていた。

いくらあるのかは分からないが明らかに俺のもってきた額よりかは上だ。

さすがの額なのか卓の住人は皆驚きを隠せてない。

しかし、何故この幼い子供がこんな額を・・・

「おっと、お兄さん。オーラスが終わってないので終わってからその男の子をどうするか決めますかね。」

対面の男は相変わらず冷静だ。

しかし、男の子はその言葉を聞き終わるとニヤリと微笑した気がした。

1 2 5 8 m 3 4 5 6 p 2 6 9 北白撥

ドラ西

俺はこの場を早く去りたかった。ありふれた打牌である北に手をの

ばした。

「ぴんずのじ。」

背後から幼稚な声が聞こえた。

振りかえるとそこにはやはり幼い男の子しかいない。

「ここは僕に任せてみない？どーせなげやりなんでしょあ？」

悔しいが確かに俺は投げやりだった。

しかしこの子供に頼むのも投げやりな気がする。どちらも同じことだ……。

「おいおい。家族麻雀と違うぜ？」

「可哀想だ手を抜いてやるーぜ？ははっ。」

雀ゴロ達は仕事になったかのように楽しみだした。しかしそうだ……。あの配牌からはp5は切らない。何がおこる……。

子供は牌をポイツと投げた。マナーが悪いな……。

「おっと、ホントに出したぜポンだな。」

下家が発声をし、手をさらける。そこには赤牌も見えた。次巡。

1 2 5 8 m 3 4 6 p 2 6 9 s 北白撥 ツモ西

こんなツモか……。終わったな……。

「このルールはトビないよねえ？」

「え？ああ、トビなしです。ハコ下になったら申告お願いしますね。」

トビ？俺の金で何しようとな……。

「ツモ！」

この発声は俺の何かを壊した。
俺は小さな標的に狙いを定め拳を思いきり振り下ろした。

しかし、その拳はオーナーによって止められた。

「あなたの決めた道ですよ？その子を信じてみたらどうです？」

信じることなんか無理だ。でも正直情けなかった。子供にこんなことやらせて……やはり同じことだったんだ。

卓の住人は笑い続けている。

だいたい言いたいことは分かっていた。

親につき4000a11罰符。局のやり直し。

しかしこのやり直しの局に奇跡の配牌が……

19s199m19p東南西北白撥撥 ドラ白

国士テンパイ！中待ち！

このガキ……これが分かっている？チョンボしたのか？それとも……

「はい、お流れー。」

幼稚な子供は悪魔のようだった。

手をさらけだし、当たり前のように次局にもつていこうとした。

「なんだよ！その手を流す！？とんだ役知らずだなあ！」

「タンヤオしか知らないんだろ??」

雀ゴ口達は見下した感じで子供に指をさし笑い続けている。

「これはこれが最高系ですからね？対面のお兄さん？」

この子供は何を言っている？もうやめてほしい……

「もういい。お金を払うからやめないか？」

「では1ぽんばー。」

子供は聞く耳を持たなかった。そして一本場……。トップとは58200点差。そして配牌。

もう見るのも嫌だ。俺は卓を離れて外の風景を見た。辺りは一面暗く光もまだみえない。この暗闇はいつまで続くのだろうか……………

ツモ。と聞こえた。もちろん幼稚な声。また罰符を払うのか……。その手を覗きにいった。

1 2 3 6 7 8 m北北4 5 6 p西西西

「いちまんろくせんおーるだね。」

喰い坊

確かに天和の手だ。そして逆転トップにたった。

「なんだこれ！サマか！」

対面の男は高ぶり幼児に睨みをかける。だが幼児はそれにも動じずただ掌をだし、

「てんぼー。あとはやくまんしゅうぎー」

どうもこんなラッキーなことがあるのだろうか……。点棒が箱の中に次々と入ってゆく。しかし幼児は100点棒を2つ卓の住人にチラつかせる。

「にほんばー。」

そしてサイを振る。当たり前にやってるがアガリやめは可能なのだ。

「なんだよ！アガリやめなしか！」

雀ゴロの額からは脂汗がでている。

「そだよー。だってあかちゃんみてないもん。」

そしてごく普通に山に開門を作りその小さい手で牌をもってゆく。卓の住人はおとなしく牌をもってゆくことしかできない。

「ただのラッキーだ、そう長くはない……。」

確かに俺も単なるラッキーだと思う。

その気になれば逆転もされてしまうのだ。

3 4 5 赤 5 m 3 4 6 7 p 2 3 4 赤 5 s 西西 ドラ西

神配牌！こいつは何かを持っているようだ……

その後は3 4 5の三色を狙ってただ手なりで打牌の速度も異常に早く……。この小さな雀士は豪運と最高の仕上がりしか見えてな

いのだろつか・・・

親・捨牌

m 5 s 2

ピンズのホンイツ？それともチートイツ？
情報が少ないな・・・

対面

2 4 6 m 5 8 p 3 4 5 8 9 s 南南西 ツモ p 5

三色とドラを活かせば捲ることも可能だが狙うのは二着だな。これだけの収入があれば逃げ切りも可能だしな。

打 p 8

「おにーさん、ロンだよ。」

ガキは手を倒す。そこには見るものを唸らせる美しいものがあつた。

3 4 赤 5 m 3 4 赤 5 6 7 p 3 4 赤 5 s 西西 ロン p 8

ダメで親倍。そして大量の祝儀。

このガキに俺の美意識をもってかれた気がした。

ダメだ・・・落ち着け。俺は鼻を右手で抑えた。今度こそ本気でキレてしまふ・・・。落ち着け。

俺は自分に念仏のように唱え続けた。

「ではさんぼんば。」

浮きが全て消えたのは天和をあがられたところから勘づいてはいたが
．．．。ここまでできたか。

全ての浮きを持っていかれ、その後はレートをあげて軍資金は根こ
そぎとられた。

雀ゴロと通しもやってみたが．．．。豪運には無意味だった。

「ごぶれーってやつだね。」

漫画の見すぎだ．．．。あの鼻の男．．．。可哀想だな。

「しかし．．．この金は全部もらっていいのか？」

子供は少々考えた後こう言った。

「いちわり。」

稼いだ（俺は何もしてないが）額は自分の軍資金を含め500万。
その一割はでかいな．．．。しかし助けられたのは俺だ。仕方な
い。

「落とすなよな。」

子供の紙袋に一割額を入れた。子供は今までで一番可愛い笑顔を見
せた。

「ありがと。あつ、そろそろかえんないと。」

時刻は深夜を過ぎて東の方角ではやんわり光が照らしてた。

「じゃーにー。」

結局あの子供は自分の金では打たなかった。

だが、もしあの子供が俺と同卓することになったら……と思うとどつしよつもない恐怖に襲われた。

「なあ？お前は『喰い坊』って知ってるか？」

友人はたまらなく目を輝かせて問いかける。

正直知らないと告げると

「そうなんか。幼児でめっちゃ麻雀強いのよ。雄太も気をつけろよ。全てもってかれるぞ。」

俺はやはり『喰い坊』のことを知ってるようだ。

「マンション麻雀でバイト？」

その提案は親友でもあり麻雀仲間である丸男からの誘いだっただ。

丸男と言う老けた名前だが俺の年齢と同じ年なのだ。

俺達はいいこの間成人を迎えやっどビールもタバコも許されたばかりだが、麻雀は昔からやっていた。

「あるんだよ！客まわりがすごく良くて人手が足りないんだとよ。」
丸男はオールバックでいつもオーバーオールを着ている。こちらとしては一緒にいると恥ずかしいが、本人は芸術だと言いやめる気はない。

麻雀の腕に関しては俺は丸男には決して届かない。麻雀を誘ったのは俺からだっただが……

俺はマンション麻雀のバイトをすることにした。ただ俺は麻雀を楽しみたかったから。

「どこか？」

「ああ。」

そこは大通りに建っている大きなホテル。マンション麻雀と聞いていたがどうやらホテル麻雀のようだ。

「地下に使わない倉庫があるんだよ。このホテルのオーナーは雀キチヤから使うのオーケーやったんだろうね。」

丸男は自慢気にそう言った。

中に入るととても青いカーペットが敷かれていた。玄関からマジモードのようにシャンデリアとかも飾ってある。こここの地下で麻雀をしっていると面白いにくい。

「いらつしゃいませ。」
ホテルマンだろうか。丁寧なお辞儀をしてきた。
「陽気な地下へようこそ。」
丸男は訳の分からない返信をすると同時に髭の生やしたホテルマンは
「お二人さまですね。陽気な地下へようこそ。」
それが返信だった。

俺たちはホテルマンに案内され、指紋認証機能のついた大きなドア
を開けてもらった。
そこには長く下へと繋がっている階段しかない。バイト先はこうも
遠いのか……。
降りに降りた先はまたドアだったが今度はでかい機械がついてなかつた。
先にドアノブに触れたのは丸男だった。

目の前には雀卓が広がっていた。
しかもかなりの人が打っているが、待っている人は全然いない。
それは人数の多さと雀卓の多さのおかげなのだろう……。
「おっ。仲間を連れてきたのかい？丸男。」
失礼だろうが、そこには人相の良さそうな若く20代くらいの人が
立っていた。頭は少々残念だが。
「店長さんやよ。このジョーカー麻雀を考えたのは。」
「ジョーカー麻雀？」
耳を疑う麻雀が挙げられた。正直詳しいルールが気になる。
「まあ、詳しいルールの前にバイトのことだが……。」

バイトの内容は卓の整備や掃除、フードメニューの注文聞いたり……
．．．e t c

どうやらここには厨房もついでおりシェフが定食からデザートまで数多くある。雀キチにとつてはまるで樂園の世界だ。

「雄太君だったね？丸男は買い出しに行ったから君にはルールを説明しようか。」

待つてましたと言わんばかりに俺は食いついたのは言うまでもない。

ジョーカー麻雀。

・ 25000点の30000点返し。

・ レートは無いが配原ビンタあり。(10万ビン)

・ 赤はm3・m5・m7が一枚ずつ計三枚。

・ 赤、一発、裏ドラ一枚につき10万円

・ 中の一枚が「萬」と言う牌がありマンズ全てに変化する。しかし赤ドラには変化しない。萬は捨て牌にあってもフリテンになる牌はない。

・ 東風戦を半分にした東二局勝負。(つまり親がこない人が二人もいる)

・ 親はサイ振り。

・ オーラス(東二局)終了後、30000点以上の者がいない場合は東四局まで延長。

こんな感じで後はだいたい普通と変わりないらしい。

「じゃあ今日はじっくり見学していきなよ。」

店長はそついで厨房の方へと歩いていった。

俺は丸男が帰るまで卓の住人の手牌を覗いてみた。

東1局 配牌 西家 ドラ m5
5 赤5 6 萬 m3 4 8 9 p2 4 6 s 南北 ツモ s7

南か北切りか・・・。

しかしその男の手をかけた牌はまるきり別だった。

打、萬

俺は寒気がした。萬はジョーカー牌なのに何故切るのだろうか？分からぬ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5340y/>

御祝儀 -闇レート麻雀の集い-

2011年11月18日06時13分発行